
遊戯の時間と騙し合い

白雅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

遊戯の時間と騙し合い

【コード】

N1810X

【作者名】

白雅

【あらすじ】

「俺にかまってほしいなら

上手に、

甘えてみなよ？」

長身で瘦身の軀を暗い着物に包みこみ

「……つかまう気なんかなくせに！」

煙草を燻らせクツリ、と噛み殺しながら笑うこの人と…

今日も今日とて「騙し合ひ」

黒い体躯

「霞！一緒に帰らない？」
カスミ

「ごめん、用事があるから。」

「またあ？」

「ごめんね！」

片目をつぶって頭を下げて。

急いで鞆を担いで教室を出る。

学校を右に曲がってその曲がり角をさらに右。
横断歩道を渡ったら小道に入って左に曲がる。
そのまま直進三十歩。

ボロくて大きな門をくぐればそこは細やかに手入れされた日本庭園
が広がっている。

『おや？また猫カスミがきた。』

この声は……

「菊ちゃん！」

そして、黒の着物をその軀に纏う

松葉 まつば
菊砂 きくすな

はそこに居る。

揺れる黒髪

「菊ちゃん。」

『お小遣いなら、あげませんよ。』

「お小遣いなんか要らない。」

要らない、と。

そつばを向く私に菊ちゃんはくすり、と笑みをこぼした。

『おや、すねた。』

くすり、くすり。

別段驚きもせず、何時の間にか煙草を燻らせ、その軀を揺らしながら菊ちゃんは笑っている。

『とりあえず、お茶でもどうですか。』

「……………いる」

そつやって私がいえば、菊ちゃんは家の中に入って行った。

私はそれを見届けるとまた庭の方へと足を向けて階段を駆け上り置き石を勢いよく踏み鳴らしながら縁側に座る。

桜の木と銀木犀の薫りがふわりとするここは日本庭園のはずなのに「落ち着いている」というよりは「何処か派手」な印象を受ける。

それはきつとここに住んでいる菊ちゃんが落ち着いているのに何処か華やかな雰囲気を出しているからだと思ってるけど。

暫し、待つ。

「……………この時間は、暇。」

菊ちゃんと居る時は時間も忘れてしまう位なのに。

菊ちゃんを待つて居る時間は途轍もなく、途方もなく、暇だ。

庭の小石を蹴りながら、菊ちゃんを待つ。

そこへ縁側に除く影。

後ろを振り向いて、思わず笑んだ。

『暇、でしたか。』

苦笑う菊ちゃんとその手に乗っているお盆。

私は菊ちゃんの言葉を無視して

「今日は緑茶ですか」

問う。

それに菊ちゃんはニコリと微笑み（こんな笑い方はレアだ。）私を見た。

それに漂う緑茶の甘苦い薫り。

『少しずつ、分かって来ましたか』

そんな言葉が返ってくる。
だけど、一つ修正。

「大分、分かって来たんです。」

菊ちゃんは私が拗ねた時、緑茶と甘いお菓子を持ってくるから。

『それは、それは。』

くすり、と微笑んだ。

ゆらゆら揺れる軀に合わせて菊ちゃん、

——その動きに合わせて 髪もさらりと揺れた。

月光を孕む黒瞳

甘苦い緑茶と一緒に出る金平糖。

「お子様扱い。」

とは、多分違うけど。

『だって貴女、子供でしょう?』

菊ちゃんの言う通りだけど。

「なんか、やだ。」

そうやって言う私に菊ちゃんは

『若いねえ、君は。』

また煙草を燻らせる。

そして煙草を啜えたままくつりと笑みを噛み殺した。

その気怠げな動作に私はドキドキする。

その細い指先は私を誘う。

ゆらりゆらゆら黒髪は私に心地良い音楽をくれる。

「どうせ 子供 ですから。」

私の言葉にまたくつり、と笑みを噛み殺す菊ちゃんは。

——男前、じゃなくて。

その細い躯と日に焼けていないと言っかも真っ白な肌をもつ（こ）
れは美白とは言わない。漂白だ。（菊ちゃん）

——綺麗、なのかな……………？

艶やかな黒髪と躍る黒曜石の瞳と。

暗い着物に身を包む菊ちゃん。

『子供、ねえ。』

そういう意味で言ったわけじゃないんだけど。と呟く菊ちゃんは艶
やかな黒髪と同じ様に艶やかで色気のある声をしている。

——怠惰で妖艶。

……………これだ。

この言葉が菊ちゃんはよく似合う。

「じゃあ、どついう意味ですか。」

私の瞳と月光を孕む菊ちゃんの黒瞳が交わった。

艶やかな声色

『さあ、ねえ……？』

憂いうれを含む妖艶な瞳を私に向けるとくつりと噛み殺した笑みを零した。

そのまま考え込んでしまったから私は制服のままごろりと縁側に寝転ぶ。

無反応。

そのままゴロゴロしてみる。

無反応。

「きーくーちやーんー？」

呼びかけてみる。

『その呼び方、やめませんか。』

反応アリ。

……顔は前を向いたままだったけど。

「今更ですね。」

『なんとなく気になったので。』

「えー。」

なんとなく気に入らなかったので続けてゴロゴロしてみた。

『スカート、めくれていますよ。』

「えっ！」

スカートを見てみるけどめくれている所なんかない。

『冗談です。』

洒落にならない。

思わず睨むけど彼はまた前を向き考え出した。

——　　なんか、こっつ。

月光を含む黒瞳も、艶やかな黒髪も、真っ白な肌も、一枚花弁を
啜えた様な唇も、着物から綺麗に浮き出る鎖骨も。

——　　全てが色艶やか（いろあでやか）。

全てが私を惑わし騙し

そして

からかいながら転がって遊ぶ。

ぼんやりしていた筈の菊ちゃんの声。

私の鼓膜を艶やかに震わせた。

チラリと覗く熟れた舌

『あまり見られるとこちらも男なのでね。』

「、ごめんなさい！」

くつり。

お得意の噛み殺した笑みを私に零すと、煙草を燻らせる。

その愉快そうな菊ちゃん表情がムカついた。

煙草を喰う口から赤い舌が漏れて…それがやけに扇情的に思えた。

だから驚いてそのまま顔ごと庭に向ける。

横でクスリと嗤うわら聲こえ。

『誘っているのですか。本当心臓に悪い。』

「ごめん、菊ちゃんって変態ですか。」

『心外です。僕は至って健全です。』

「そうですか、セクハラですよね。おまわりさん。」

『それこそ貴女の方でしょう。僕の何処を見てたんです？』

「！どっつて……どこも見てませんっ。」

『どうだか。』

そして首をこてん、とかしげなら言うこの人はいろんな意味で確信犯だ。絶対。

そしてそのまま身を乗り出さないで欲しい。合わせ目がはだけてその、本当に心臓に悪い。

「っ……………」

じんわりと顔が赤くなっていくのが分かる。

菊ちゃんが満足そうに目を細め、くすりと笑う。

『ねえ、霞。赤いよ？』

「誰のせいだと思って…！」

『ん？』

ここで聞き返しますか、こいっ…ゴホンゴホン。…………この人はここで聞いてきますか。

意地悪く顔を歪め微む菊ちゃんはム力つく程に美しい。

早く言え、と黒瞳が責める様に私に告げる。

———こんな顔されたら言うしかないじゃない…………。

「菊ちゃん、の、せい。」

私が言の葉を口に出せば菊ちゃんは本当に、本当に妖艶に、綺麗

に、美しく、微笑んだ。

そして私の髪を一房持ちそこに口付けながら菊ちゃんは上目遣いでこう言った。

『君が俺の言葉で動揺する様ってのはどうしようもなくそそるね？』

菊ちゃんはやっぱり変態だ。

その言葉に私が立ち上がり一目散で家に帰っても致し方ないと思う。

出会いは突然に。そんな話をしようか？（前書き）

中途半端な所まで進んでいます。

今日中にはなんとかできるように………できるかな。

出会いは突然に。そんな話をしようか？

「ただいま……」

急いで戻った後、小声で帰宅を告げる。

「おかえりー！今日コロッケよ、冷めちゃうから席ついてっ」

なんて言う母の声も聞こえるが、菊ちゃんの事を考えると、それさえ煩わしい。

今だって、思い出すだけで、菊ちゃんの声に、仕草に、詞に全てが私を狂わせる。

私が菊ちゃんと出会った頃は春の桜吹雪が吹く頃。曇天で空さえも私たちの出会いを祝福してはくれなかった。

「あぁー、憂鬱ー」

五月病：？なんかじゃないけどこんな春先からこんな天気じゃ憂鬱になるのも仕方ないと思う。

空は曇っていて今にも雨が降り出しそうで、そんな中視界の端を暗い色が走った。

——着物？

現代離れた、暗い色の衣服を纏った人。
傘を子供のようにくるくると回しながら歩いていた人に私は興味
を持った。

ふ、と角を曲がる姿が見えて急いで追った。
壊れかけの門をくぐる。

——すごい。

彼を追った先にあつたものは見事な日本庭園。

『お客さんですか、珍しい。』

艶のある声。

「え。」

顔を挙げれば彼はそこに居た。

——気配、しなかつた。

驚きすぎてパクパクと口を動かす。

『とりあえず、お茶でもどうですか。』

穏やかで皮肉気に笑つた彼に。

「は、はあ。」

何故か返事をしてしまった私は

『なら麦茶を用意しましょう。この天気だと、ちよつと憂鬱になるのが貴女みたいな年頃の子でしょう？麦茶はさっぱりしますよ。』

私は何故か知らない彼とお茶を飲む事になつたらしい。

そして私の気持ちをピタリと言い当てた彼はちよつとエスパーかもしれないと疑った。

これが最初の最初の出会い。

出会いは突然に。そんな話をしようか？（後書き）

ちょっとつけたしてみました。

お腹空きましたね、更新サボっててすいませんでした。

非日常

この時、この時間

彼を追いかけていなければ。

彼を求めているければ。

私は今よりも憂鬱で、だけど平和な日常が、送っていたのだと、そう思うのです。

けれど、やっぱり、過去が変えれたとしても。

私は彼の事を追いかけるのでしょうか。

「やっぱり、行かなくちゃ。」

私は急かされるように家を出て…

少し憂鬱で、だけど退屈な日常に後ろ髪惹かれながら。

そっと非日常へと踏み出しました。

だけど……

『こんな夜に出歩くなんて、危ないですよ。』

「その人、誰ですか。」

『子供は知らなくて良いんです。』

「馬鹿っ！」

非日常もそんなに甘くは無いらしい。

非日常（後書き）

どうも、お久しぶりです。

書いて、何書きたかったか忘れてしまつて書き直したら大変な事になりました。

私は意外と、ドジらしいです。

彼と彼女と帰り道

なんですって、思う。

でも仕方の無い事だとも思う。

「本当、菊ちゃんは酷いよね。」

綺麗なお姉さんと一緒に居る菊ちゃんを見たのは今日が初めてでは無い。

「おや、なんの事やら？こんな時間に子供が出て来て来て良いと思ってるんですか？もう遅いんですから家まで送りましょう。貴女は家で待っていて下さい。」

お姉さんは少し苦笑いすると分かったわ、早く来てねと菊ちゃんに返した。

・・・余裕だな…ムカつく。

「良いよ、一人で帰れるよ。ちょっと散歩してただけだもん。」

菊ちゃんはまた、くつりと笑みを噛み殺した。

「では、これからはしない様に。」

菊ちゃんは先生みたいに私に注意する。

そして低く艶やかな声で呟いた。

「俺みたいなの奴が霞を食べちゃうかもしれないからね。」

耳元と言つ超至近距離で咳かれた私は顔に熱が集中するのが分かった。

「送らせて、くれますね？」

「ほんと、菊ちゃんは酷いよ。そしてずるい。」

褒め言葉をありがとつなんて…あんな声で咳かればみんな腰が碎けて息もできなくなつちゃうと思う。

執筆途中

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1810x/>

遊戯の時間と騙し合い

2011年11月22日23時52分発行